

《教育長メッセージ 第32号》

『ひとりひとりを大切にすること』

学校の目標や学級の目標などを説明する時に、教職員は、よく「ひとりひとりを大切にしたい指導・支援」「ひとりひとりに対応したきめ細かな指導・支援」という話をします。

私も、よくそのように話してきましたし、今でもよくそう話します。

それは、教育に携わる者にとっては、「ひとりひとりを大切にすること」は基本中の基本だからです。

それでは、教育の中で「ひとりひとりを大切にすること」ということは、どのようなことなのでしょう。



大前提は、子どもたちひとりひとりがそこにいること、存在していることを、ひとりひとり地球上でたったひとつの命であるという尊厳を抱いて認めることです。

その上で、教育は、ねらいを持って、計画的に子どもたちひとりひとりの成長を促すものです。すべての子どもたちに備わっている「よりよく生きよう」とする遺伝子を支えて、自分の夢や思いを叶えるための力や人とつながって支え合いながら豊かに生活する力などを、学習（体験）をとおして身につけるものです。

若い頃、私は学級担任として、熱意を持って、指導にあたっていました。と言うより、私には、自分が子どもたちに失礼のないように教員として存在するためには、それしかなかったのです。

学級の子どもたちを同じ土俵の上で指導しなければと考え、けっこう強引に指導していました。子どもたちは土俵の上にあがりましたが、無理をしていた子どもがいたことなのでしょう。子どもたちが私を助けようと気を遣っていたのでしょう。

教育は、時に、大切なことを忘れます。私がそうだったように、真に子どものことを思って熱心に指導していると自分が信じていても、自分中心の考えになり、子どもの願いや思いが抜け落ちて、子どもの成長による結果を生まない場合があるということです。教育は、常に、子どもが中心であるということを忘れてはならないのです。

そしてさらに、「ひとりひとりを大切にすること」ためには、中心に据える子どもたちひとりひとりの特性をよく理解する必要があります。

その理解の上に立って、ひとりひとりの成長を支えることが、「ひとりひとりを大切にする教育」ということになるのです。

次回は、『若葉の頃』について自分の思いを述べたいと思います。そして、その次に、今回の『ひとりひとりを大切にすること2』として、子どもの支援について、自分の考えを説明します。